

俺と太陽

俺は あの日

利根川の土手に座り込んで

ぐるぐる燃えておちていく太陽と

長い話をした

その時から 俺は

太陽と義兄弟の契りを結んだのだ

おたがい 困ったときには

助け合おうと誓ったわけだ

奴は馬鹿正直だから

約束どおり

いつも俺を助けてくれるが

俺は自分のことで手いっぱい

いつも 夕方

ちよつと挨拶するだけで

親身にあいつの苦勞を

考えてやったことはない

そんなわけで

とんと不義理を重ねているが

そこを 少しもかまわぬところが

また 奴の偉さだ

きょうも 俺は

困ったことがあって

あいつに相談にいった

真昼間は 奴も忙しいから

相談するのは いつも夕方

おたがい 仕事じまいの頃に限る

きょうは

お茶の水の橋の上から

奴に言葉をかけた

神田川の水は まったく

日ましに汚れていく

堂々と沈んでいく奴に

かいつまんで用件を告げた

そしたら 奴さん

いつになく さりげなく

「思い出を大事にしろよ」

と言ったきり こつちをにらみやがった

野郎 つめたくなつたな

俺は そう思つて

喫いさしのバットの殻を投げてやった

だが その時はもう

奴がいつも自慢している

あの馬鹿でかい夕映えしか

俺の目には入らなかったが・・・

だが いつもそうだが

奴の言葉には重みがある

かめば かむほど味があるってわけだ

「思い出を大事にしろよ」などと

えらそうな言葉をぽつきりひとこと

吐き出して いっちまったが

考えてみれば なるほど

俺が 誰より奴を信じているのも

実は この「思い出」って奴のせいなんだ

俺が 筑波の麓の

土臭い町に生まれおちて

嫁の欲しい年頃まで

長いこと生きてきたあいだ

奴は いつも俺と一緒にだった

あの頃も 今も奴は全く少しも変わらぬ

いつも真っ正直に生きている

いつも燃えるように生きている

そうだ

あしたの朝まで奴は来ぬから

ここで 奴の話をご披露しよう

奴は とつても純情なんだ

自分の口から言うことは絶対ないから

かわりに 俺が話そう

奴は 実は

あのお月様が好きなんだ

あの 慎しみぶかく あでやかで

奴なんぞよりはるかにエレガントな

あの お月様に

奴は前から参っていたんだ

すでに長すぎる恋に悩みながら

いまだにそれを打ち明けることもできず

月が昇る頃になると

奴は たちまち

顔を真赤にして沈んでゆく

あの途方もなくぜいたくで

尨大きわまる夕映えの道楽も

このことと関連して

たしかの意味がこめられている

月の出の舞台の端を

思いつ切り気前よく
飾りたてているのだ

それでも ときどき

あふれ出る愛の衝動に

大きな胸を痛めることがあるようだ

だが 奴が大物であるように

お月様も また

桁はずれてエレガントだ

ともすれば

奴の仕事の真っ最中

つまり

晴れ渡った真っ昼間の大空の一角に

お月様が ひっそり

たたずんでいることがある

あれは あの

お月様の尨大な優しさの現れだ

そんな日の夕方は

あの太陽の大将め

疲れた体をものともせず

この大天空の たしかに半分を

壮大な夕映えにとかしこむのだ

(一九五五・九・未完)